

五名におよび、ひろい会場は会の熱氣にあふれて、盛会であつた。この一本展がひらかれ、さきほど亡くなられた松方三郎名譽會員追悼のコーナーには遺影をはじめ著作、書簡などが展示され、また、會員有志のもちよつた山岳文献が参会者の注目をひいた。

種三、三田幸夫の四氏が、盛大な拍手のうちにそれぞれ名誉會員章を受けられた。四氏を代表して三田幸夫氏はつぎのように語つた。

「名誉會員に推挙していただいてたたいへん名譽におもいます。名誉會員についていろいろ規則があるでしょうけど、會員名簿をのぞいてみましたらたうエーストンさんが名誉會員に推薦され

また新・永年会員として中島正文（病氣欠席）、成瀬岩雄の二氏、上高地山岳研究所建設にあたって多大の尽

生誕百年記念出版

送料荷造代 二〇〇円

昭和四十八年度年次晩餐会



昭和 49 年 (1974 年)
1 月号 (No. 343)
社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

行事報告

昭和48年度年次晩餐会…近藤信行… 1
第303回 小集会・忘年会
……小倉 厚… 2
第16回紅葉会報告……山本朋三郎… 6
高所登山研究会（第1回）
……原 真… 6

本

山下一夫さんのこと…望月 達夫… 3
川崎市の高台から眺めた
南アルプス……………松岡 良助… 3
田中澄江さん一行と小樽丸山
……………滝本幸夫… 4
イ・エル・ストラットの偉業(上)
……………成瀬岩雄… 5
鮭, 蜂, 守門山の記……………藤井運平… 6
越後駒ヶ岳懇親山行……………清水春美… 7
員通信(海外)
川崎にて……………大鹿 周… 7

圖書紹介

尾瀬、松枝岐への山旅…望月達夫… 8
山 行……………山崎安治… 8
知らなかった美しいイタリア
……………山崎安治… 8
時報・甲南山岳部四十周年記念号
……………山崎安治… 8

EVEREST SOUTH
WEST FACE.....

12月理事会	8
図書室便り(10,11月)	
ルーム日記(10,11月)	9
復活,新入会員住所変更等	10
上高地山岳研究所基金状況	11

ら、入念させていたのだ次第でありまして。なんのかんのかと在籍五十年にわたってしまいましたが実は今でもこれとどこだとおもっている次第です。年令の層もひろいし実力の方もひろいしうっかりしたことを言うことやられてしまうような感じがあります。学校ではたいしたことを教わりませんでしたが、会社社つとめも平々凡々でしたが、今日まで私をみちびいてくださったのは、日本山岳会でありました。五十年たって、こわいおじさんからおほめのお言葉をいただいたようで感激しております。せめて長く生きぬいて山々をのぼりつづけたいと考えております」

このような先輩諸氏の元氣な談話が、あったのか、横有恒名譽会員の発声には、より、一同乾杯。「年次晩餐会には、はってでも来たい」という横氏の言葉により、会場のあちこちから爆笑がおこりに「異議なし」の声もかかった。参加者は会場のあちこちで歓談をつづけ、午後八時半ごろまで、山の友誼をあたためあった。

年のマツヤサロンについて今回は二年
立食形式による年次晩餐会、一昨
年のマツヤサロンについて今回は二年
度目のところのみであり、先輩諸氏の談
話が十分にききたいという懸念も
あったが、板倉常務理事の司会や
そんな杞憂をふきとばすほどあざやか
なものであった。会場の設営にあたっ
た山崎安治常任評議員、伊倉剛三常
務理事に厚くお礼を申し上げる。

新名誉会員 紹介

(名誉会員)

辻 莊一氏

明治二十八年十二月
岐阜県生。大正

五年七月入会、会員番号四八七番。小学生のときから神戸裏山を歩き、中学三年から北アルプスその他に登り、もっと高く広く登りたいと思っていたところ、運悪く病氣のため行動を制限され、大きい登山ができなかったことが惜まれた。その代り旧制第七高等学校山岳部の創設、さらに立教大学山岳部の部長などになりわが国における初期大学山岳部の育成ならびに登山の奨励に貢献した。氏は現在でも体力の許すかぎりの小登山を行っている。

日本山岳会では、評議員として、小集会での講演「山岳」への寄稿などを通じて会の運営に尽力された。

加納 一郎氏

明治三十一年七月
大阪市生。大正七

年十月入会、会員番号六四三番。中学生時代より御岳、槍ヶ岳などに登るとともに京都近傍を歩き廻る。北大に入るや、スキー部員として主として北海道の山城を舞台として板倉勝宣氏等とともに冬季登山に専念し、十勝、芦別、旭岳などに登るとともに小島鳥水等の大先輩の影響を大いに受けている。その後朝日新聞に入社するや、藤木九三氏らと数えきれない程の登山を行っている。

山岳会では、関西代表の理事として尽力したほか「氷と雪」をはじめとして数多くの極地の探検のなど多彩な執筆活動を通じて、わが国登山界に多大の貢献をなした。

早川 種三氏

明治三十年六月
仙台市生。大正十

四年三月横有恒氏の紹介により入会、会員番号九二三番。慶応大学在学中より多彩の山岳活動を行い、とくに大正年代における東北地方(蔵王、吾妻など)の積雪期登山のバイオニヤックの役割を果たした。なお、同氏の山岳活動のうち特筆すべきは、大正十四年、横有恒氏、三田幸夫氏等とともにカナデアン・ロッキーに遠征、アルパタの初登頂に成功しわが国登山界の名を遠く海外に知らしめた。

山岳会においては、評議員をつとめて一方ではマナスル、エベレスト登山後援会の幹事をつとめるなどその功績は極めて大きいものがある。

三田 幸夫氏

明治三十三年三月
横浜市生。大正十

四年五月入会、会員番号九二四番。主なる山行だけをみても、大正年代における北アルプスの夏季および積雪期の登山、前述の早川氏等とのカナデアン・ロッキー、アルパタの初登攀。ダー・グリーン、キッシムへの遠征、バンジウム・クルの冬季山行、第一次マナスル登山に隊長として参加するなど多彩な活躍があり、わが国山岳界の黎明期における開拓者として、また、国内のみでなく広く海外での活躍を通じてわが国山岳界に果たした功績は極めて大きいものがある。

また、山岳会においては理事、評議員、副会長、会長などの重責を果たしている。著書には「山なみはるかに」遠い山はるかな旅」「山のがき大将」などがある。

(永年会員)

中島 正文氏

明治三十一年十月
富山県生。大正

十二年六月吉沢庄作・高野鷹蔵両氏の紹介により入会、会員番号八五七番。

(別名 中島 杏子氏)

明治三十一年十月
富山県生。大正

若きより立山、白山、黒部などを舞台として山行を重ね今日に至っている。また同氏は「神河内志」播磨上人の生涯と槍ヶ岳開山」「日本登山史略」など多くの山岳関係の著書が多いが、山岳人としては珍しい俳人として名高く、その方面の著書も多い。

山岳会では同じように「山岳」への執筆を通じて尽力されている。

成瀬 岩雄氏

明治三十八年六月
東京市生。大正十二

年十一月近藤茂吉氏の紹介により入会、会員番号八六五番。早くより山に親しみ大正の初期より、東北、北海道、中部を主な舞台として多彩な山岳活動をする一方、「山岳」「山」などへの執筆活動を通じての登山思想の普及に果たした功績は大きい。著書に「山、よき仲間」がある。

昭和四十八年度年次晩餐会出席者名簿(順不同)

三田幸夫、早川種三、辻莊一、加納一郎、成瀬岩雄、浜野正男、板倉勝正、伊倉剛三、野島福三郎、山本朋三郎、亀田与三、横山厚夫、高木崎男、村上勝太郎、蒲生明登、神原忠夫、今西錦司、平沢亀一郎、高遠安、織内信彦、原潤二、柴田均二、伊達寛、山崎安建、浜野吉生、今西寿雄、山崎安治、渡辺公平、藤島玄、山本利彦、南雲克良、今井雄二、今井喜美子、後藤幹次、北島光子、奈須文枝、水野公男、岸栄、清水春美、青木一夫、山田哲郎、千葉保之、浜口欣一、高山忠四郎、宅間清子、関根吉子、塚本佳一、岩瀬浩、藤井運平、藤原武夫、田村扇一、柳宏子、安彦六郎、横田明男、近藤信行、中野征紀、鳥居亮、島田巽、堀内章雄、村井米子、錦織保清、武藤晃、

風見武秀、斎藤桂、岡部みち子、高田真哉、三浦蔵、青木昇、藤江幾太郎、山形不二男、三宅伯二郎、松家晋、渡辺力、丹部節雄、沼倉寛二、大倉寛、信雄、越田和男、川村博通、大倉寛、荻野恭一、笠原藤七、山下久男、佐藤金一、千葉重美、長尾徳夫、山口健児、徳永芳雄、近藤恒雄、関口周也、松田章、真仁田美智子、穴田雪江、渡辺正臣、大田俊夫、平林克敏、松岡良助、今井研二、堀田弥一、折井健一、早川義郎、林和夫、藤田佳夫、中島信一、遠藤光男、中村太郎、堂本曉子、伊藤知子、黒石恒、雁部貞夫、吉村健児、堀川英司郎、国見利夫、広谷光一郎、大倉昌身、牧野四子吉、川井秋子、加藤泰安、松田雄一、桜井善志、今井嘉道、小倉童子、永尾和夫、塩田良伸、川上隆、松永敏郎、芳野赴夫、菊池修身、田中元、石田要久、小林優、荻野和夫、鈴木昭、百瀬一茂、高橋憲二、西堀栄三郎、日高信六郎、木村勝久、吉沢一郎、塩湯庄太郎、磯田和夫、名須川浩、須田紀子、村岡昭三、水野弥彦、藤島敏男、野口末延、浦野勇逸、篠繁市、小原勝郎、茶谷東海、津田周二、木下是雄、石坂昭二、岩永信雄、吉田久兵衛、進藤波男、金坂一郎、竹田寛次、横有恒、佐々保雄、中保、古賀昌子、村尾金二、河野幾雄、森川洋佑、金山淳二、中川武、島根康郎、今岡義夫、小倉茂雄、大塚博美、田部井淳子、湯浅道男、牧野文子、望月達夫、尹官炳、森宏子、石森芳太郎、周布光兼、北林嘉鶴子、永沼雅子、瀬名貞利、増田洋子、山本良三、徳久球雄、日下田実、関田美智子、中河より一、中島寛、伊藤信夫、川崎吉蔵、広羽清、油谷次康、岩崎三郎、原謙一、平山武志、今木良彦、吉武正子、板倉昌子、武田満子、田畑真一、高橋定昌、田口二郎、酒井吉国、山田格、細井隆司、内田慶治、宮森常雄、羽田

(第三〇三回小集会)

賑かに忘年会

集合委員会と婦人懇談会共催の恒例の忘年会が、さる十二月二十日、山岳会のルームで開催された。忘年会は午後五時過ぎより、若い委員の方々に会場準備が進められ、六時頃より神崎集委員の名司会のもとに、三田前会長の乾杯の音頭によって幕が開けられた。会員は机一杯に並べられたビールや馳走ににこにこ。まず、自己紹介、それぞれ適当にPRを兼ねてスピーチにルームは爆笑の渦となった。一通りの紹介が終わると出席されていた牧野文子さんが自分で誤訳された「大尉の遺言」を山口節子さんに所望。山口さんの美声にルームが酔った。宴たけなわとなった七時過ぎより例によってプレゼントの交換。女性から男性へ、男性から女性へ、心のこもったプレゼントと手紙。これもつぎつぎに公開された。心のこもった物、工夫をこらした物さまざま、年令・性別を超越した人間味があふれていた。やがて、余興となったが、勝田房治氏のザイル講習会はまさに圧巻。持参の細いものを駆使しての奇術には、口の悪いJACの諸公もしばしば咄然。ただ真剣に手をとるだけであつた。ついで司会の神崎氏の奮闘により美声、蜜声の入り混った全員の大合唱がしばしばにこにこ。そして、最後に、山口さんのリードのもとに、しんみり「清しこの夜」と「蜜の光」で幕がおりた。午後九時過ぎ。参集者、四十三名(小倉厚)

山下一夫さんのこと

望月達夫

古い手紙を整理していたら、山下一夫さんから戴いた自筆のエハガキが出てきた。

先日タケノ萱越えて万場の今井屋へ泊り、翌日は滝不動から東御荷鉾へ登りました。タケノ萱は土坂峠の東で麻生へ降る峠で、また大兄にでも逢えそうなき覚を覚えました、今度は残念でした。太田部の下の一軒屋で道を聞いたら、家の中へ引張り上げられ、屋間だと云うのに一杯飲まされて、峠道はフーフーでした。

小川の何とか明神のお祭りだった由、滝不動からは不動沢沿いに登って、愛宕山のう一つ北のユブの、北側の鞍部を越えて、堂場までいい機道がついていました。この前は塩沢峠から西御荷鉾越えて投石峠へ降ったので、こんどは東御荷鉾から投石峠へ降り小柏へ出て帰りました。残念ながら、南側はもう全く雪がなくな、北側だけが雪道を少しめしました。この前の奇遇を思い出して、つい一筆した次第です。

昭和四十三年三月二十一日の消印のあるエハガキで、三月十七日にかかれた滝不動の淡景スケッチが美しい。山下さんはJACのルームで古くからのお馴染みであり、ここ十数年来目的とした山や峠も、似たりよったりのところが多かったから、一度一緒に行きましょうと言いつながら、遂に果たせなくなつたのは、まことに寂しい。たしか昭和二十八年五月初旬に、JAC東京支部の連中と三条ノ湯から雲

取山へ登り、三日目に唐松谷を下って日原へ出たことがあったが、それが山下さんと一緒に歩いた唯一回の機会となった。そのときは神谷翁も加わり、なかなか賑やかで、美しい花をつけていたトウゴクミツバツツジの名を、山下さんから教わったのも、その道すがらだったと思う。

さきのエハガキの文面にある山の中でバツタリ逢ったのは、日記を繰ってみると昭和四十一年の、やはり春のお彼岸のころのことである。藤島(敏)さん、川喜田(壮)さん(あかワさん)も既に亡くなられたが——とわたしは、上州の下仁田を振り出しに、稲倉山へ登って梅ノ木平に泊り、次の日は炮烙峠、投石峠を越えて万場の今井屋へ、藤島さんは所用で先きに帰られ、三日目は川喜田さんと二人で土坂峠を下って千鹿谷鉱泉に泊った。土坂峠の下りで丁度下から登ってきた山下さんの一行と出会って、まさに奇遇に驚きあったのである。まだ土坂峠に車道が通じず峠の南斜面は暖かい春の陽をふんだんにたくわえて、ねむくなるような閑静な一時であった。

奇遇と言えど、山下さんとは前にも岩手県の網張温泉で偶然出会ったことがある。昭和三十八年の晩夏のこと、わたしたちが松川温泉から岩手山に登って、すっかり暗くなってから、当時はまだきかなかった網張に辿りついてみたら、早池峰から廻ってこられた山下さんからバツタリぶつかって、お互いに奇遇に驚いたことがあった。

昭和四十五年一月、わたしは滝不動から曾遊の東御荷鉾を訪れたことがあ

るが、山下さんのスケッチに心を動かされて行った記憶があり、帰ってからその話をしたことがある。

山下さんには戦前既に南アルプスの案内書の著述もあり、この十数年よく各地の山を歩いておられたから、その足跡の広さは想像に余るものがある。また若い頃から高山植物や野草をことのほか愛したというから、山下さんと行を共にしたら、随分花の名などを教えて戴けたらと思う。

坂本直行さんの『雪原の足跡』や大島堅造氏の『山の古典と共に』足立源一郎画伯の『日本の山旅』、初見一雄さんの『すこし昔の話』などは、山下さんの尽力で立派な本になった。にも拘わらず、御自身は紺屋の白袴だった。スケッチにも巧みであった山下さんの望み得るなら画文集でもできないうものだろうか。これは故人と特に親しかった渡辺公平さんと坂倉登喜子さんにひとつ一肌も二肌もぬいで戴きたいと思うのは、わたし一人ではあるまい。(一九七三年十一月四日)

川崎市の高台から

眺めた南アルプス

季節のうつかりにより、絶えず変化していく様々な山の景観の中でも特に晩秋の頃、新雪に覆われた岩峰のひかり輝くような山容ほど感動的な眺めはない。新緑の香たただよう初夏から紅葉の秋に至るまで、あれほど賑やかだった山々も、秋もたけなわを過ぎ、なにかの悲しいような静かな山の風景に変わる。空は果てしなく蒼く、遠くの山々のヒダまでが認められるほど澄み

わたり、日本アルプスや、上信越国境や北国の峰々が新雪に覆われ、最も鮮明な山容を見せてくれるのは、ほぼこの頃からである。私の登山活動も十月の上旬頃には暮を閉じ、その後しばらくの間は一休みをする。そして晩秋の頃からは、新雪の山を眺めることを目的として、再び山へ足を運ぶというのがここ数年のなりわしである。年間を通じて最も空気が澄み、遠望の利くこの貴重なシーズンをどうして見過ごすことができない。雪山の神秘的な眺めに接することが無上の喜びとする私にとって、晩秋の頃から翌春にかけては、実にかげがえのない期間なのである。私が訪れる先は、甲信地区や、上信越国境周辺が主であるが、もし幾日かでも連続して休暇が取れるような場合には、飛騨や、そして更に越中まで足をのばすこともある。この期間では山に登るのではなく、雪山風景を観賞するために敢えて出かけるのである。

しかし山国へ行けば好きな時にいつでも「白い峰」を展望できるとはかぎらないのだ。予め現地の天候状態を調べた上で訪れることができるが、予報に反し、全く眺めることができなかったという日もザラである。予期せぬ荒れ模様の中を一人しづぶと引きあげたことも数知れない。だからこそ、運よくあらゆる天候条件にも恵まれ、念願が叶った晩には、私は狂ったような奇声をあげて踊りだすのである。長い時間暗い山道を歩き続けた後、急に視界が開け、もし眼前に朝日を受けて白銀のごとく輝く岩峰がその新鮮な姿を表わした場合には、いつものことながら、それはもう大変である。私は泣きながら、一時間でも二時間でも気が済むまで雪と岩を眺める。もしそれが過去に幾度もなく登り、そして眺めたことのある馴染みの深い山であったとしても眺める角度をいろいろと変えて見るこ

とにより、彼女はその度毎にフレッシュで凄麗な容姿を見せてくれるからである。パノラマのごとき大展望というのは、私の特に好むところではない。赤岳や木曾駒から望む中部山岳の三百六十度わたる眺めは、スケールに於いてはまさしく第一級に属するものであるが、雪山の本当の美しさを味わうためには、何もそんな大型のスケールを必要としなくても良い。名もない峠や山道からでも良いのだ。私はあらゆる角度から、即ちあらゆる場所から眺めることにより、絵になる雪山風景を見いだしたいのである。北関東及び上信越国境あたりの比較的低い山々でも、一旦雪に覆われると、それはわが目を疑いたくなるような気高い美しさに輝き、その神秘的な山容は、日本アルプスの高峰と比較しても、何ら遜色がないほどである。ぼろをまとった牙えな

い格好で、寒さに震えながら、何時間も同じ場所に居つづけ、美しい雪山を眺める。こんな山国での数時間が、私にはたまらなく楽しい。雪山を最も美しく眺めるためには、それ相当な距離というものがあ。あまり遠すぎるのも良くないし、逆にあまり近すぎてもその美しさが半減する。しかし、何よりも大切な条件の一つは、「サイエンス」の汚れを知らない純粹な風景でなければならぬということである。観光旅館が建ち並び、山岳ハイウェイを利用して訪れるような場所は、排気ガスで山も霞んでしまふだろう。雪山風景は、主人公である雪山とその脇役である様々な前幕との組合せであり、雪山の美しさを生かすも殺すも、全て脇役次第である。そういう条件になつた名もない場所を探し歩くことこそ、この期間に於ける私の山旅の目的なのである。仕事や家庭の事情で、どうしても山国へ行けない場合がある。そんな時には、一時凌ぎの積りで、山の地

図や、雪山の写真集を掲げて見るのが常である。いろんな空想ができて、これも結構楽しい事には違いないのだが生きている大自然とは、所詮比較にならない事を知る。だがそんな場合に私を幾らかも慰めてくれるものがあるのだ。それは、私がこれから述べんとする川崎市の高台から遠望する事ができる南アルプスの「白い峰」なのである。私のいう川崎市の高台とは、東名の川崎インターから厚木街道に向い最初の信号を右折し、約六百mほどならかな坂道を登った所にある鷺沼郵政宿舎(川崎市高津区鷺沼一七七四)横の高台のことである。この高台は、京浜地区では一際優れた南アルプスの展望台である。距離にして約百二十kmという遠望であるため、純白が決して鮮やかではない。しかし「公害の街」京浜地区からでさえ、あらゆる天候条件に恵まれた場合には、遠望できるところに計り知れない喜びがあるのだ。十二月月上旬頃より翌年の二月末頃までの期間内に於いて、強風を伴った時雨や、吹雪が幾日続き、夜半にびたりと止んでくれればしめたものである。時雨や吹雪でなくても首都圏上空のスモッグを完全に追っ払ってくれるだけの強風が終夜続き、もし翌朝が快晴であるならば、南アルプスを遠望する事ができる絶好のチャンスだといえよう。私は、まだ空が暗い中にその高台へ出かけ、大都会では滅多にお目にかかる事のできない早曉の星を仰ぎながら、日の出を待つのが常である。日の出後のこの高台からの展望は実に目見事である。向って左から箱根、富士、丹沢、御坂山地、南アルプス、大菩薩連峰、奥秩父と続く鮮明な山並みが誠に壮観である。条件さえ良ければ、男体山を中心とした日光方面の山々まで眺める事ができる。中

でも、とりわけ御坂山地と小金沢連峰との山間で、更に遠く、南アルプスが純白に輝く姿は、横綱の貫録とでも形容したいほどの雄大さである。白峰三山の「展望台」として、私は過去に西六郷あたりの多摩川の河川敷へも幾度か足を運んだ事もあるが、それは殆ど無駄に等しい事を知った。従ってここ数年は、専らこの高台が中心である西六郷に比較し、約十五kmも南アルプスに近いという事にもよるが、この高台から西の方向にかけては、大きな工業地帯が無いということが遠望のために実に大きく幸じているようである。私がこの高台を知ったのは、三年も前のことであるが、スモッグにより、京浜地区から南アルプスを遠望することと殆ど絶望視していた時だけに、初めてこの高台に立ち、南アルプスを眺めた時は、眼蓋があつくなる思いであった。しかし、唯一残念な事は、この高台からは間ノ岳と農鳥岳のみしか見え、北岳は前景の蓮子山に妨げられ全く眺める事ができないということである。それでは参考までに、今年に入ってから、その高台より南アルプスを遠望する事ができた日の記録を述べて見ることにしよう。【一月】三日—A九日—B、十二日—A、十四日—B、二十七日—C、二十八日—C、【二月】二日—C、八日—B、九日—C、二十一日—B、二十五日—A、【三月】二日—B、日付の次の記号は、山容の鮮明度を表わし、Aは誰にでもはっきりと認められるほどの状態を示し、Bは山好きが注目すればそれと判る程度であり、Cは微かに見える状態を示す。Cの中には一月二十八日夕刻のシルエットによる遠望も含めた。尚、昨年の十二月中に於ける記録が無いのは、地方へ長期にわたり出張していたためである。今後、首都圏に於ける車の登録台数が年毎に増加して行き、その上、もし甲州街道沿線の主要な街に大きな工

場が数多く建設されるような事にでもなれば、川崎市の高台から南アルプスを遠望する事ができる「貴重な日」は年々と数少なくなって行くに違いない。条件の下と雖も、全くその姿を見せなくなる時代が必ず訪れる事であろう。スモッグにより山が見えなくなってしまうか。これは大都会周辺の宿命なのだろうか。だが、山好きにとって、これほど忙しと思うものはない。

(松岡良助)

田中澄江さん一行と

小樽丸山

聊か旧聞に属するが、昨年夏、作家の田中澄江さん、お馴染みの写真家三木慶介さんが来道。東京高水会(田中先生が提唱された年輩女性の山好きのクラブ)の一行二十数名と、大雪縦走(湧別—梶合平—中岳—旭岳)と道東の秀峰斜里岳完登という一週間の北の山旅のフィナーレに、小樽まで足を延ばして丸山へ登っていった。

丸山(六二九m)は、天狗山と並んで、小樽市民には馴染みの山ではあるが、夏はハイキング、冬はスキーのメッカとして小樽の文化を支えてきた天狗山の、地に付いた派手さはない。しかし山好きが、春の日の淡光を受けながら、残雪に輝く羊蹄山や余市岳の峰々を心ゆくまで望見したり、夏のガラガラと照りつける陽に、タンネの樹林帯をくぐり抜け、岩山を攀じ、眼下に広がる日本海の見事な海岸線を積丹の果てまで追っ楽しさは到底天狗山の比ではない。

たまたま、高水会の登山日程のことと田中先生より依頼があり、二軒、三軒苦の末、何とか車や宿の手配を取

り付け、一週間の山旅をセッとし終えたが、フリーになった後の日程は、執心の大千軒岳が今回は無理なら、何とかニセコに山塊ぐらいいへ、ニセコも駄目なものならせめて小樽の山へ、ということになり、七月末の盛夏、潮まつりにわき立つ小樽の街へ、田中先生のご長男聖夫氏ともどもお招きして、丸山へと登ったのだ。

小樽市内を一望に見渡せる旭展望台に、堂々の構えの小林多喜二の文学碑があり、この種のものとしては一級品、という感嘆の聲に、なる程仲々ユニークなものとなつて見直してみたりしながら、登山口までの悪路に悩まされつつ、会員の川中泰助氏や職場の山仲間が待つ丸山へ。

も良き山、良き山歩きという評判に、「丸山よ、北の山をこよなく愛でた深田久弥さんに、あいまみえることはなかったけれど、いま良き登山者を迎えた、良かったな」と、この小さな巨人の頂上にある祠に心で祈る僕だった。帰路は、西病院の西信博氏(北大山岳部OB)やご母堂と、由緒ある鯉御殿を保存しつつ、そこで本因坊戦も行なわれたこともある旅荘銀鱗荘でひと休みのあと、潮まつりを見学するという三木慶介さんを残して、明日名古屋で講演のある田中澄江さんは、一路千歳へと小樽をあとにしたのだ。

(滝本幸夫)

お詫びと訂正

会報三四二頁、横有恒氏の松方三郎氏へのカコミ記事、弔辞の中の「二段目右より二行目「君はことさらに」とあるは「君はさらに」の誤りにつき訂正、また、三四二頁二段一行目「中屋健二」は「中屋健一」、終りから六行目「故安立源一郎」は「故足立源一郎」三行目「三宅前会長」は「三田前会長」、同じく二行目「中尾副会長」は「中屋副会長」、三段九行目「明神池まで三宅、中尾」は「明神池まで三田、中屋」、五段前より四、五行目「中尾副会長」は「中屋副会長」四段六行目と五段八行目に「高山忠四郎氏」とあるは「高山忠四郎」のそれぞれ誤りにつき訂正、深くおわびいたします。なお、同号一段三行目、「準備のた」は「準備のため」、二段四行目「末着目」は「末着工」カコミ記事三行目「ぐい食み」は「ぐい飲み」の誤植につき訂正いたします。

先般（一九五七年）アルバイン・クラブ（A・C）の百年祭に際し、同クラブの所蔵にかかる十八世紀から十九世紀にわたる登山に関する逸品が多数展示された。その出品目録を見ただけでも、さすがに百年の伝統を誇るにふさわしい貴重品の羅列で、時のたつのも忘れさす小冊子なのであった。

この中に、久しくウィンザー公の許に保管されていた門外不出の「ストラット大佐の日記・一九一九年二月一四月四日」と云うものが特別出品されたのであったが、これ等は国宝に値するものと云ってもいいのではないだろうか。何しろ筆者は一九二九年エベレスト登山隊の副隊長、一九三五年一九三七年のA・C会長と云う輝かしき経歴を持つストラットのことである。したがって彼が永年にわたり足繁く通ったオーストリア、チロール方面の……或はエベレスト登山中の日記か……と一応は想像するだろうと思うが、実は全く登山に関係のない「世界史」に残るような偉業を成し遂げた時の日記なのである。その詳細についてはむしろ史学者の語るにまかせるのが順当であり、私の如き浅学非才の敢てするのはそれこそ正に暴虎馽河の偉業（？）ではあるが、一応「チャーチル卿（Sir Winston Churchill）のこの日記に関する驚嘆、感激を先ず前置としてから概略文をここに記して見たらと思う」と云うのはこの日記の全文は最近アメリカの著名史学者により「The Last Habsburg」なる題名の書物の中の一

章として初めて公開され、その全文を知ることが出来たのは、少なくとも私にとって永年、何んとかして読みたいと待望久しきにわたっていたものだけに、ホットした次第なのである。ただ特に版権云々の言葉が付記されているのでその全訳を記すことは出来ないと思うので、その概略を茲に記すことにしたい。

チャーチル卿の激賞文
「この若年の英将校が奥国大臣をおどかし、すかし、当時奥国に幽閉状態にあった国王、王妃が在位のままでも無事、故国を一時的に同行させしめた武勇伝は読む者を驚かすに足る。故国を一時去る事に同意せしめた武勇伝は読む者を驚かすに足る。故国を一時去る事に同意せしめた武勇伝は読む者を驚かすに足る。」

先祖以来この方、七百年連続、帝位にあったこの地を後にせざるを得なかった不幸の君主の国外脱出の一幕は正に後世史上に残るものであり、若しこのストラットの勇敢なる行為がなかったならばハプスブルグ家はとも簡単にロマノフ家同様、虐殺の悲運に会っていた事は火を見

Edward Lisl Strutt

イ・ヘル・ストラットの偉業（上）

成瀬 岩雄

るより明らかな事である」。

第一次大戦も一九一九年の頃になると開戦以来既に四年も経過した交戦国は漸く戦争に疲れも出て来たが、オーストリア王室は当初の友邦国であったドイツに反して、敵国たる連合国にひそかに単独講和を持ち掛けて来たのであった。開戦当時は絶対君主制であったオーストリアも、その頃には首都ウィーンでは社会民主主義とキリスト教社会主義より成る連立政権が成立し、皇帝の地位剥奪、追放を宣言して意気揚々たるものであったので、この単独講和の申入れは、真実は七百年も続いたハプスブルグ家のカール皇帝が秘密の願であったのだ。

一方連合国に於ても英、仏、露は三

国協商が夙に締結されていた事でもあるので、英国としてもその手前、単独講和受入れに正面切って公式に動く事は出来なはずもなかった。特にフランスは強行に反対を示しており、つまりストラットと英政府の間は飽迄一私人として連絡を取りつつ新政権、フランス、ドイツと三スクミ、四スクミも交渉相手をついてハプスブルグ一家を救おうと云う難事業をやつてのけうと云うわけである。だからチャーチルの如き大政治家すら感激する政治的手腕、頭脳の働き、体力は何んと言っても永年、ストラットが山で鍛えたネバリである。それに彼がオーストリアの学窓に青年時代を送ったドイツ語の

堪能も大いに役立ったのではないかしら。正に彼を措いて最適任者と云う可き者はなく、また当時、外務省には後のA・C会長をつとめたアメリカも控えていたのだから、彼も大いに意を強うしたのではないであらうか……。

当時、トルコ前線にあったストラットはオーストリア国内のEckartsseeに軟禁状態にあった「皇帝一家を至急訪ねMoral Supportを与えよ」と云う暗号電報を一九一九年二月二十二日、午後二時に受取ったのであった。しかし彼自身にとつては大体Eckartsseeなる都市はオーストリア内の何処の辺りか……皇帝とはカール皇帝であることか……Moral Supportとはどんなことか……等の漠たる命令ではあったが、

兎に角トルコより海陸の遠路を経て、Eckartsseeに辿りついて国王の側近を訪ね、王家の安全、防衛、日用品、食糧、医薬品に至る迄万端、屢々送り続けて王宮内に起居して万一を慮つて常に短銃をまとって或は狩猟に或は散策に或は釣に国王の御供をしたりして事態の推移を見守り、一方国王も全面的にストラットを信頼してMoral Supportを続けていたのであったが、時にはドイツ兵によって国王向けの物資輸送の妨害、略奪を受ける事もあったが三月十五日になって、事はいよいよ急を要する事態に迫られ英政府より「急拠国王一家をスイスに護送せよ……」との暗号電報を受取ったのであったが但し書として「但しこの旅行に際しての貴殿の身柄については英政府は一切保障しない……」との但し書きが厳然と付記されていたのだからさすがのストラットも一瞬口元を噛みしめて暫し電文に眼を注いだのであった。飽迄狭いこの拳に出ることの出来ない連合国側の一員たる英国としては当面、当然の処置と云え、まことに「むごい命令」であつたのだ。併し一方、こんなことにひるむストラットではないし、或は却て奮起を促したかも知れない……直ちに首都ウィーンの状況如何にと、ウィーンに飛んだのであった。

既に連立政権はレンナー首相を主班として（一）国王、王妃としての総ての権利を放棄し、一市民としての野に下るならばオーストリア国内に止まってもよい、（二）飽迄退位を拒むなら国内に幽閉する、との三条件を掲げて意気揚々たるものであったので事態は益々重大、緊急を要するものと逸早く覚ったストラットは今や強行談判するの愚を覚り、即刻ウィーン鉄道局に連絡国王脱出の特別列車の手配を整え、一方、スイス大使館に赴き国王一家受入れの懇願に成功したのであった。この間僅かに五分の素速さであつたと云う、併し、まだまだ彼にとつては幾多の難問が控えていたのであった。国王王妃が果してスイスへの脱出を承知するが……、が、第一の関門であつたのだ。Eckartsseeに直ちに取つて返した彼は早速国王に拝謁。

当時、オーストリアの皇帝、王妃の陸しは欧州社交会においても常に美談として普く知れ渡つていたのでストラットにとつては一応、無理ではあるうと思つたのであったが兎に角、国王に対してヒゲを剃り落してストラットの着換着をまとい、帽子はスコットランド高地人の用うる緑なし帽子に変装して荷物に雑糞、従者は一人だけでまず最初に国王一人だけスイスへ脱出、ストラットは直ちに引返して王妃、皇子を連れ戻す……と進言したのであったが、国王は王妃と相談の結果、案の条、王妃、皇子と一緒になければ……と承知されず、一方、王妃には最早、オーストリア国内は騒然として王家の安全は期し難く、後日、世相の落着を見て故国に戻るとして一応、スイスに一刻も早く逃れるのがよく、ハプスブルグ家も生きてこそ価値がある。死んでは何もない、と強行に進言したところ、漸くカール皇帝が退位することなく……と云うストラットの約束を信頼してスイスへの脱出を承諾したのであった。一方連立政権の党首レンナーは断固、ハプスブルグ家の王朝を永久に抹殺すると云う強行意見を抱いて止まず、三月二十日、ストラットは初めてレンナー党首に会見して、（一）国王がスイスに脱出するという社会的宣言は取消し、（二）国王が比較的、平穩であつたチロール地方に止まる事を認めないか……と談判して見たが（一）は認めるが（二）は認めないとのことであつた。（以下次号）

第十六回 紅葉会 報告

(十一月三日～四日)

日本晴れの天候にめぐまれて、遠州森町の奥山、種々の伝説と史蹟にめぐまれた、三倉山地にある真言宗の密教禪寺で、十六回の紅葉会の第一日を催す。

五十年振りにこの地を訪れたと言う八十八歳の松本善二氏の懐古談は、昨日の山行の報告の様に生々しく精わしい。おかげで翌日山行のメンバーが移動し、春登山行きがふえた。元氣な、日高信六郎氏の話は、最多参加の記録保持者だけに毎年の参加者の移動にくわしい。藤島敏男氏は流石に銀行マンらしく物事に数字が入り、話の折目が整然としている。沼倉寛二郎氏が出張った腹の調整に良いと、中国大極拳の型の披露。気のせいお腹が昨年よりスマートである。村尾金二氏が十年程前の紅葉会で、西沢峠の天幕場で、暴風雨の中で一夜中、支柱を持って活躍した斎藤かつら嬢との想出を話す。酒も入り懇親会たけなわであるが、自分の適量だけ、たべて飲んで八時半頃になるとサッサと寝てしまうのが、麻生武治氏の一日の終り。終始、微笑を断やさぬ岩永信雄氏は禪室にふさわし、会の終るまで正座。然し入歯をはめるのを略したせいかわ微笑と話声が入り混って、聞く者には一寸モグモグと良く呑込めぬ話声であった。

折井健一氏が難病を克服して先日北アに行ったばかりとの事。藤井運平松本熊次郎、名兄郎達男の諸氏は酒、我が道を行くで静かにたのしんで居た。遠く、山形から岡部みち子氏、名古屋の川北仁氏も参加され楽しい会は、朝井一男氏と神田チエ女史と、独話の会議は踊るの合唱も興を増すばかり。

熱っぽく、J・A・Cの行き方を討論していた、小方全弘、中保、池上和男、小林伸吉の若い諸君の愛心心には感心させられた。同感する所が大いに有った。

禪寺らしく、住職の、ハイこれまでとの消灯宣言で総べての雑音、妄想が止まり静寂な山中の夜となる。

翌日、A班、春登山を経て秋葉山。B班、春登山から森町。C班、家山下り。三班の東海自然歩道コースをとって散会する。

参加者 松本善二、日高信六郎、藤島敏男、原田幹市、村尾金二、名兄郎達男、山崎金次郎、麻生武治、佐藤佳年、野口末延、藤井運平、折井健一、成瀬若雄、岩永信雄、朝井一男、松本熊次郎、鶴岡元之助、沼倉寛二郎、中保、小林重一、小方全弘、山田哲郎、川北仁、斎藤かつら、神田チエ、沢田エミ、岡部みち子、牧野衛、山本朋三郎、同悦子、同健二、同康三、稲垣一郎、石間信夫、岩永安雄、水野公男、勝見幸雄、山口亮、柴田昌亮、内藤正名、池上和男、小林伸吉、鶴見敏彦、名倉美代子、伊藤千代子、果つや子、村松享 以上四十八名

(山本朋三郎)

高所登山研究会

(第一回)

一九七三年九月二三日(土)三三日(日)

上高地山岳研究所

金坂一郎、宮下秀樹、神崎忠男、加藤幸彦、阿部和行、塚本圭一、松本

童雄、浅見正夫、原真(以上高所登山研究会委員)

清水春美(集会委員)

植村直己、田部井淳子、奈須文枝、

堂本暁子、黒岩恒、舟橋高、古瀬勇

一

高所登山研究会は三年前に日本山岳会に出来たが、集会は一度も開かれなかった。個人的には大きな抱負を持っている人もいたが、何となく方針のさだまらぬままに日がたってしまった。今年には具体的な活動を始めようということになり、委員を十七人に増やした。新築の山岳研究所で最初の研究会を持つことになった。金坂委員長以下十七人が初秋の上高地に集った。うち委員は九人、他の七人は傍聴希望者並びに手伝い人であった。

山小屋(山岳研究所)の整備が予定より大分おくれれており、まだ電気と水がなかった。石油ランプをつけ水は栓川から汲んだ。かえって風情のあるヒュッテン・レーベンとなった。

二日二日二時頃からほぼ三時集まり始め、夕方までにはほぼ全員が来た。夕食をかき酒を飲みながら深夜三時まで大いに語り合った。話題はあまりにも多岐にわたるすぎたため、簡単に整理出来ない。今回の目的の一半は親睦にあってから、その目的は初日に達成されたと思う。我々としては型にはまらない自由な交流を主題としていたので朝の三時まで議論を楽しんだこと自体に満足している。

ごらんのようになり異質な人々が集ったから、最初はどうしても誰かの話題提供が必要だった。それは宮下、金坂の両氏にやってもらった。宮下さんは高所登山研究会が三年前に出来たいきさつは、エベレスト遠征(七〇年)を徹底的に検討したためだったと云った。その後エベレストだけでなくマカルー(七〇年東海支部)をも比較検討しつつ研究をすすめるつもりでいたところ、マカルーの報告書がちゃんと出来ないのでなかなか研究会の方針がたたなかったのだと理由になるような、ならないような説明をして責任の一端をマカルー隊のせいにした。要す

るに第一回の研究会がひらかれるまでの間にいろいろの思案はしていたのであると。

金坂さんは、マナスルのと日本山岳会内部に海外登山研究会が出来た二度目までは非常に気分がよい会であったが、その後だんだん大世帯になって面白くなくなり、それは現在の日山協海外登山研究会に発展したか退化したかした、という意味の話がされた。

その先で話題はあらゆる方向にひろがったのでいちいちここに記録できない。十二時すぎからは松本と原の間で水雪技術の問題で意見が対立し、三時までつづいた。

翌三日は朝の九時から、すこし建設的な議論をした。

高所登山に関する研究書を一・二年の間に完成させようということ、その内容について検討した。まもなくわたりあった試案に一・二の項目が追加された。この先最低二カ月に一度は集会を持って仕事をすすめるということになった。エクスペディションの実行についても議論されたが具体的な話にまではすすまなかった。次回は十二月中旬京都で開かれた。

高所登山といえはヨーロッパあたりでは六、〇〇〇m以上くらいを云うらしい。この高度は日本人の場合は少し下げてよいだろう。いずれにせよ、日本にない高さでの登山ということにはなるが。

高所登山の研究と実行に本当に熱心な人を我々は探している。実行と研究の両立する人間は案外少ないのではない、か、いたらいづつでも申し出てほしい。この会は個人の交流が第一条件だからサークルの臭いのする集団主義者はいっさいおこわりする。

関連分野として医学、地球科学、生物、人文、歴史、文献などの分野での

専門家の協力もおおごとになる。このあたりもおもしろいと構想をねってゆかなければならない。そんなことも話題になった。

翌四日、松本、浅見、原、舟橋は岳頂で野宿し、二五日にこぶ尾根から奥穂高へ登った。私の精密な観察によれば、松本以外の全員が二、〇〇〇mで高山病にかかり、私の説を実証してくれた。

(原 真)

蛙・蜂・守門山の記

スモモン

図書委員会のメンバーが主体で、新潟県小出町在破開川のやな場で蛙を食う会を前座としてこの山行は始まった。十月二十日の夕は、やな場のいりりを囲んで、破開川で漁れた蛙料理、うなぎの頭のナマス、ルイベ等思いがけない珍味で酒宴が始まった。山崎安治君を筆頭(旧姓佐々木孝子さん)、山本良三、高遠宏君、事務局の杉山さんと全ての肝いり役である伊倉剛三君と私の十名である。蛙の他に一・五キロの天然うなぎ二匹、鮎無数等々、焼魚は何んと云っても炉辺で串焼き焼が最高である。一同勝手なことをししゃべったり歌ったりしている間に気が付いた時は十二時であった。

翌二十一日の天気予報は時々雨であったが、朝八時五味沢の浅井さん(音松莊)がマイクロパスで迎えに来て出たのは頃は、空は高曇りで、遠くの山々が見えていた。会津若松へ抜ける立派な自動車道路を見線に沿って大臼川の部落へ着いたのは九時前であった守門川沿いに上り、大原の太平洋クラブ経営のスキー場の整備工事現場(標

高四〇〇m)に着いたのが九時十五分このような処まで大資本が進出してゐるのに驚かされた。

林道が車止めのため、ここより歩きとなり、登山口(標高六三〇m)迄旧道をススキに顔をなでられ乍ら一時間十五分、登山口近くの開墾地はソバの白い花盛りであった。袴岳より南西に派生している尾根の支稜への急登が始まった。樹林帯の急坂を四十分程あえいで頂であらうか上の方で時ならぬ叫び声を上げて騒ぎが始めた。

急坂の踏みあとの奥にちん座していた地蜂の巣を誰かがけつとばしたのである。蜂群に襲われて刺される者多数中でも最大の被害者は高遠君であった。耳、手、腕、足等無数に刺され、痛みは東京まで続いたようである。先頭の二、三名は駆け上り無事だったそうだが、私はあえいで遅れていたのが幸して四らずも被害者達の蜂踊りを眺めるはめとなり、騒ぎが少し治まってから現場を迂回して事なきを得た。

九四九m地点で始めて眺望のよい稜線上に出た。目前には大雲沢の滝のかかった源流、その上には袴岳頂上を含めた三つのコブが聳えている谷は紅葉の盛りであった。また狭い稜線の急登が始まる。私はついに音を上げて次の休み場で荷物を近藤、山本君に持たせて貰う次第となる。稜線の岩場の登りが終わって左へ歩きながら少し下り、上祝沢の源流に出た時には、これで急な登りが終わったとほっとした。灌木地帯を過ぎて田小屋登山道の尾根に辿りついた。しばらく登って三の芝に出、枯れた草原に身体を投げ出したときの心地良さ、一行はしばし無言であった。また頂上に向かって灌木地帯をゆっくり登り、灌木がきれて間もなく袴岳(守門山主峰)一五三七m頂上の祠の前に出る。十四時過ぎであった。頂上付近は密生したチシマツツジ、ヤブ地帯で

あった。目を見はらせるのは、三六〇度ささげる山もなく西は越後平野、東には浅草岳、燧岳、中岳、魚沼駒岳八海山、谷川連峰とすばらしい展望に暫く疲れも忘れて眺めていた。

袴岳より北方の大岳一四三二mに至る尾根すじの北側は稜線から急に落ちこんでいる。大岳までの間、南へ派生している支尾根が三本、何れも登山路となっている。一五〇〇mとはいえ山頂では、汗も冷え少し寒さを感じ、私は疲れた故か飲料があっても意気が上らなかったのは年の故であろうか。

一行は、頂上まで上ったうなぎの頭と鮎をサカナに元気発刺うらやましい限りであった。出発は十五時と決まり下りは大岳から保久礼を経て栃堀へ下山する予定であったが、日暮れを考慮急遽、青雲より二分登山路を下ることになった。尾根すじを二分口の分岐点まで広いカヤトの尾根を地塘のある草原を通り乍ら約二十分、二分登山路は一、〇〇〇mあたりまでは樹林帯で尾根が広くい道である。紅葉がこの尾根の左側、本高地沢の谷一帯が行程中で一番きれいであった。九〇〇m付近からの尾根すじは両側がそげ落ち、砂岩の露出している狭い稜線上の路が続き、最後の八八二mのコブの手前で路は左に捲き乍ら本高地沢に向って下りとなつていく。時刻は五時近く大分うす暗くなって来た。この下りは、僅かな足場を刻んだ苔むした斜面である。やつの思いで下り終えたときには、急に疲れが抜けたようにほっとした始末。あとは踏跡を刻んだ滑り易い坂道を落葉に助けられ乍ら護身清水に着いて飲んで清水は誠に美味かった。傾斜のゆるくなった山裾の路を下り、工事

中の林道の本高地沢にかかった立派な橋のたもとに着いて間もなく日はとっぷりと暮れて闇夜となり、霧雨が降り出して来た。広い林道を二分部落に着いたのが十八時四〇分、小出に帰えるトラックに声を掛けられて乗せて貰ったことは、これまたツイていた。私はあえき乍ら終始したのだが、一行のふんいきの故か楽しい山行であったことを心から感謝している。(藤井運平)

越後駒ヶ岳懇親山行

婦人懇談会

目がさめた時、列車は下車駅の小出を過ぎ、小千谷駅のホームに入っていた。ああ、何たることだ。超満員の夜行列車にもかかわらず、我々、斎藤、須田、清水の三人は、上野駅を下車真際に食堂車の一等寝台に乗り込み、すぐ寝入ってしまったらしい。

小出駅では、山口、梅野、秋田の三人と合流するはずなのに、きつと心配しているに違いない。駅員さんに事情を話し、小出駅に電話連絡をお願いする。

須田「東京の山口さんと言って下さい」

駅員「東京だけではわかんねえんじやないかな」

須田「それではJ・A・Cと言って下さい」

駅員のひとりごと「J・A・C……ジャパン・アクロバット・クラブ……」

女三人「……」

誰の姿をみて、アクロバットとは？私達は猿山の猿ではないゾー!!

駅員さんの親切によりタクシーを呼んでもらい小出に向かう。

小出駅前には百名以上の人が銀山湖方面へ行くバスを待ち、長い列を作っていた。バスの中でもみなグッスリ眠ってしまいい、いつの間にか終点の新枝折峠に着いていた。

十月ともなるとさすがに寒く、朝食はおあずけで歩き始める。東京は雨が降っているようだが、ここは紅葉と青い空と、白い雲のコントラストが美しく、しばし歩みを止めて眼下に光る銀山湖や荒沢川、そしてこれから登る駒ヶ岳を眺めたり、植物の話をしたり、一人一人が秋の山を楽しみながら山登りをしているようだ。

そして楽しみがもうひとつ。それは、食べることである。朝食には、あてもおいしい筈の神田で買った餃子がある。店員が、もしもすかつたら代金を返すと言っただけに、さすがになかなかの味だった。今回は各自がとっておきの食べ物を一種類ずつ持参することになっており、何が出てくるか楽しみである。

小倉山までは急な登りもなく、少々のおんびりしすぎたようだ。昼食をとった場所に荷物をデポし、駒ヶ岳に向かう。今迄とは違ってかなり速いスピードで歩いたので、あつという間に駒ノ小屋に着いてしまった。今日は小倉山まで戻って駒ノ湯泊りの予定なので、休み暇もなく山頂に向かう。午後一時山頂着。残念ながらガスで展望はなく早々に、山頂を引き揚げ下山を開始した。目指すは駒ノ湯、野天風呂。小倉尾根はかなり急な道で、この道は絶対登るまいと思ひながら、ひたすら下り続ける。

皆、膝が笑っているらしい。

頑張った甲斐が出て、日暮前には駒ノ湯に着くことが出来た。

昔の吊り橋はなく、鉄筋コンクリートの赤い橋は、今にも崩れそうなのなびた駒ノ湯の建て物とは、不似合である。

野天風呂には屋根も囲いもあり、想像していたものとだいぶ違うので、がっかりしてしまつた。二十五度位の温度では寒くはでず、またまた

残念なのである。傾いた部屋でテーブルを囲み、山菜料理に舌つみをうって、話はつきない。今回の懇親山行は天候に恵まれ、よく寝、よく食べ、よく歩き、とても楽しい山行でした。(清水春美)

会 員 通 信 海外

Calgary 21P

“山岳”送っていたいただきありがとございました。山の写真を楽しんで見えています。

この夏は、Calgary支部とも、だいぶおぼたして、ハイキングにさえも出掛けずじまいでした。一生果敢やったことと云えば、飛行機の操縦のレッスンです。ひととおり、済み、後は、筆記試験を残すのみとなりました。が、九月から、大学へ行く準備と、なかな英語の授業を取り出したので、なかなか忙し、航空マニアルの方が読めず、受験が延び延びの有様です。スキー・シーズンの前には、免許を取得した後、スキーに精を出す時間を作りたいと願っているような現在です。

雪と云えば、昨年に比べ今年は、遅いようです。積る程には一度もまだ降っていません。落葉が、街路に一杯です。山々はだんだんと白さを増しています。

さて、最近、住所を変えましたので、郵送先の変更をお願いいたします。

旧: 2011 Georgia St. S.W. Calgary
新: 64 Haddock Rd. S.W. Calgary
Alberta, Canada
No. 7131 Shu Oshika

では、お元気で
一九七三年十月十八日
(事務局・岩佐氏宛)

(大鹿 周)

図書紹介



尾瀬、檜枝岐への山旅

中村 春二著

著者中村春二氏は後年成蹊学園長となった人だが、明治三十三年（一九〇〇）同氏が東京帝大生であった頃、付属中学五年生五名をつれて尾瀬、檜枝岐へ山旅をした。その日記は三十三年十二月小冊子として刊行され、また明治四十年に他の登山記と共に『旅ごろも』と題し単行本として刊行されたが共に今日では容易に見ることのできぬ書物となっている。尾瀬関係文献としては、極めて早期のものであることから今回この複製が企てられた。なお複製の機縁を成瀬岩雄氏が序文にかき、別に子息中村浩氏の解説が添えられている。

内容は赤城山―戸倉村―尾瀬沼―檜枝岐―ねいもう峠―川俣温泉―大笹峠―小休戸村―小百村―日光という行程を旅信の形式で述べたもの。檜枝岐から川俣へ越すねいもう峠とは、引鳥峠と同じか或いは別の峠かなど、一寸読んだだけでも興味が少なくない。

また詠草として和歌十八首を収める一行六名の旅姿が巻頭に写真で示されているが、七十余年前の学生の旅行姿を知る好個の資料であり、この中には石黒忠篤氏、穂積重遠氏等後年知名人となった人も含まれていることも面白い。表紙は天下藤次郎氏。B6判三八頁、昭和四十八年八月岩崎美術社刊、頒布価格五〇〇円、希望者は山岳会ルームで求められる。（望月達夫）

山行

槇 有恒著

槇さんのこの名著については、いまだ説明するまでもないが、こんど旺文社から文庫本で出版されたので紹介しておきたい。昔の「山行」などいまだ古書展などで、若い玉のとび出すほどの値段なので、眼の人にも手軽に入手出来るようになったことは、まことに喜ばしいと思う。安川茂雄君の解説がついているが、これはちょっと、おしやべりが過ぎた感じなのは残念。昭和四十八年九月旺文社発行、二八六ページ、文庫版、二二〇円。

知らなかった

美しいイタリヤ

牧野 文子著
牧野四子吉絵

おしどり夫婦として知られる牧野夫妻による楽しいイタリヤ紀行である。「人間の創り出した美しい物の宝庫であるイタリヤは、一度や二度の見物ですむ国ではない。簡単にいえばあまりのご馳走にたびれたというのか、帰国後は暗がりのカタツムリよろしく、満ち足りた心の冬眠をしばらくむさぼっていた。――心楽しんだ旅の土産話を、人様におすそ分けしない法はないところ思い始めた」と著者は前がきに述べられており、心暖まる知らなかった美しいイタリヤの本が出来上った。小宮山重平氏は、この本の終りにこう書いている。「この本には、親しいさ

さやきやきめきが、いっそう豊かに実っている」。

昭和四十八年九月理論社発行、三九〇ページ、定価千円。

時報・甲南山岳部創立
四十周年記念号

甲南山岳部編

新刊ではないが、今回新たに図書室に寄贈されたものである。甲南山岳部といえ、伊藤慶、田口兄弟など、初めそうそうたるメンバーで、戦前の日本の登山界に数多くの記録的な登山を行なったことはあまりにも有名である。

しかしその部報は、一、二号が公刊されただけで、あとは部内報となり、一般にはほとんどわからず、部分的には戦前の関西学生登山連盟報告などでその行動がうかがわれるだけであった。昭和三十九年、創立四十周年を期して発行されたのが本書である。部の四十年の歩みを、それぞれの時代の人たちが概観したあと、小槍、滝谷、早月尾根、ジャンダルム飛騨尾根、穂高奥又白谷、鹿島東尾根、剣三ノ窓、チソネ、池ノ谷尾根、穂高白沢より飛騨尾根など、多くのパイオニアの記録がずらり、キラ星の如く並んでいるのは、まさに圧巻である。

OBによる、それぞれの当時の思い出話も興味深く、巻末の主要登攀記録表も参考になる。

昭和三十九年十一月、甲南山岳部、甲南山岳会発行、二三七ページ、非売品。

(以上・山崎安治)

**

EVEREST SOUTH
WEST FACE

by Chris Bonington

エベレスト南壁（あるいは西南壁）を目指した一九七二年秋の英国隊の行動を、そのリーダーであった著者が詳述しているのが本書である。「アンブルナ南壁」の成功を記録した本の著者でもあるので、ボニン頓氏はかなり広い視野に立って、この巨大な壁への挑戦の歴史から説き起している。当然、一九六九年の日本山岳会による最初の偵察行動と翌七〇年の八、〇五〇mへの到達が、先駆的な業績として一章を費して述べられている。この著者なりの批判も当然記されているのでその点も一読の価値があると思う。

それにつづく国際登山隊、ヘリングコフターの欧州隊の業績、それに自らの敗退の記録を詳述したあと、短いながら一つの結論が述べられている。ここに詳しく紹介する紙幅はないが、著者はブレ・モンズン期の登攀には成功の可能性ありとして、そのための諸条件にも触れている。エベレスト登山史にとって重要な文献の一つであることはまちがいない。(Hodder and Stoughton, London pp 352, 1973, £3.95)

(島田 巽)

会務報告

十二月理事会

(七日午後六時本会ルーム)

出席者 織内副会長、板倉、伊倉近藤、春田、神崎、松丸、須田、大倉山本、丹部、田村、堀山、浜口各理事、山崎評議員、委任出席、中屋副会長、宮下理事、金坂評議員

△議案
一、秩父宮記念学術賞授賞候補推薦の件 (板倉)

日本学術振興会より、表記候補者の推薦方依頼があり、北大の「ネパール地質調査研究」の業績を推薦することにしたい (了承)

二、明治大学ダウラギリV峰登山隊推薦状交付の件 (丹部)

都岳連に交付方出願する (了承)

三、昭和四十九年度事業予算について (各委員)

新年度の事業予算について、各委員会は明年一月十一日までに、事業計画と予算を提出すること (了承)

四、会員章の取扱いについて (板倉)

会員章は、交換の場合を除き、今後いかなるお客さん(国籍を問わず)に對しても、本会の会員章は差し上げない (了承)

五、ルーム使用時間について (伊倉)

理事会、委員会等、ルームの使用時間を午後十時迄とする (了承)

六、理事代行の件 (須田)

須田理事が三月まで海外に出かけるので、その間、婦人懇談会から代行を委任したい (了承)

△報告事項
・近代登山の先駆者たち「鳥水、理太郎、金次郎生誕百年記念展」について (近藤)

会場には、係員として、準備委員一名が当たるが、理事のうち都合の出る方から応援を願いたい (了承)

・年次晩餐会の件 (伊倉)

出席者二三名(内招待者五名)で盛会であった。無断欠席者が一名あったが、余剰金が十五万五千元出たので雑収入に繰入れる。次回から会場は、同じ場所に決めたらどうかという意見もあり、総務委員会を検討することに

する。 丁承

・支部運営費補助の件 (伊倉)
定款で会費を支部経由で納入した場合、一名に付き三〇〇円を支部運営費として補助しているが、今後、支部経由、否にかかわらず助成してはどうかという意見があり、財務委員会を検討することにする。 丁承

図書室便り (昭和48・10)

新刊図書受入報告

(1) 日本山岳会編『山岳—第1年第1号—』(複製版)
甲南山岳部寄贈

(1) 甲南山岳部編『甲南山岳部報—創立40周年記念号—』昭和39
中央公論社寄贈

(1) 木下是雄著『スキーの科学』(中央新書 三三九) 昭和48
成瀬岩雄氏寄贈

(1) 中村春二著『尾瀬松枝岐への山旅』岩崎美術社 昭和48
浜野正男氏寄贈

(1) 浜野正男著『ソロモンの人形』昭和48
板倉勝正氏寄贈

(1) 慶応大学山岳部編『登高行 III』大正10
(2) 慶応大学山岳部編『登高行 IV』大正12
牧野文子氏寄贈

(1) 牧野文子著『知らなかった美しいイタリア』理論社 昭和48
岩永信雄氏寄贈

(1) 日本山岳会編『山岳—第2年第2号—』(複製版)
(2) 日本山岳会編『山岳—第2年第3号—』(複製版)
(3) 日本山岳会編『山岳 67年』

定期刊行物受入報告
〔部報・会報〕
(1) エーデルワイスクラブ『Edelweiss』

No. 43 (48-10)

(2) 日本ヒンズー・タシニ会議『HKT ニース』No. 11 (48-10)

(3) 兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 78 (48-11)

(4) 『ふくろ山岳会月報』No. 146 (48-10)

(5) 日本山岳会関西支部『関西支部報』No. 25 (48-9)

(6) 林野庁『国有林』No. 8 (48-9)

(7) 国立公園協会『国立公園』No. 287 (48-10)

(8) 京都山岳会『京都山岳』No. 583 (48-11)

(9) 奥多摩山岳会『O.T.M.レポート』No. 287 (48-10)

(10) 長野県山岳協会『山岳協会ニース』No. 31 (48-9)

(11) 日本山書の会『山書月報』No. 129 (48-10)

(12) 日本自然保護協会『自然保護』No. 137 (48-10)

(13) 日本医科歯科大学山岳部『杣』No. 29 (48-9)

(14) 低い山を歩く会『低山』No. 100 (48-10)

(15) 神奈川県山岳連盟『とぎわ木』No. 38 (48-10)

(16) 日本山岳協会『登山月報』No. 53/54 (48-9)

(17) 日本登山協会『山と雪』No. 185 (48-10)

〔雑誌〕
(1) 『アルプ』No. 188 (48-10)

(2) 『岳人』No. 317 (48-11)

(3) 『古地図研究』No. 44 (48-10)

(4) 『山と溪谷』No. 422 (48-11)

〔その他〕
(1) 立教理山岳会『Himalayan Expedition Rikakukai 仮報告書』
(2) 京都大学学士山岳会『Yalong Kang 1973—ヤルンカン遠征隊報告書』

〔新着海外雑誌〕

1. "Der Bergsteiger" '73-8, '73-9.
2. "Chicago Mountaineering Club-The Newsletter" Vol. 27, no. 1, March '73.

3. "The Geographical Journal" No. 139, Part 1, June '73.

4. "La Montagne et alpinisme" No. 93, 3-'73.

5. "Österreichische Alpenzeitung" Folge 1390, Juli/Aug. '73.

6. "Panorama of Slovakia" '73-3.

7. "Rivista mensile" Anno 94, N. 6, Giugno '73.

8. "Sierra Club Bulletin" Vol. 58, No. 7, No. 8, June, July/Aug. '73.

9. "韓国山岳会会報" No. 15, 7-'73.

〔洋書受入報告〕
日本山岳会学生会部モリナルブライニ遠征隊寄贈

1. Major H.P.S. Ahluwalia "Higher than Everest—Memories of a mountaineer" Delhi, Vikas, 1973. (昭和48・11)

〔新刊図書受入報告〕
創文社寄贈

(1) 宇都宮貞子著『八重葎帖』昭和48
旺文社寄贈

(1) 横有恒著『山行』昭和48
山と溪谷社寄贈

(1) 加曾利隆著『極限の旅』昭和48
小倉厚氏寄贈

(1) 小倉厚著『山ゆへ心』昭和48
田村協子氏寄贈

(1) エリック・シンプトン著『嵐の大地』昭和48
定期刊行物受入報告

〔部報・会報〕
(1) 山村民俗の会『まじな』No. 139 (48-11)

(2) 日本コトニヤ山岳協会『コトニヤ』No. 33 (48-10)

(3) 日本ヒマラヤ山岳協会『ヒマラヤ研究 VII チベット・ラダック研究』

(3) ふくろ山岳会『月報』No. 147 (48-11)

(4) 国立公園協会『国立公園』No. 288 (48-11)

(5) 長野県山岳総合センター『所報』(48-11)

(6) 日本山書の会『山書研究』No. 19 (48-12)

(7) 稲門山岳会『会報』No. 32 (48-11)

(8) 日本山岳協会『登山月報』No. 55 (48-10)

(9) 横浜山岳会『山』No. 495, 496 (48-9, 10)

(10) 日本登山協会『山と雪』No. 186 (48-11)

(11) 日本山岳資料協会『古地図研究』No. 45 (48-11)

(12) 低い山を歩く会『低山』No. 101 (48-11)

〔雑誌〕
(1) 『アルプ』No. 189, 190 (48-11, 12)

(2) 『岳人』No. 318 (48-12)

(3) 『若く雪』No. 34 (48-11)

(4) 『山と溪谷』No. 423 (48-12)

(5) 創文『No. 123 (48-10)』
〔その他〕
(1) 玉川機械金属株岩松製作所山岳部『ふたやう』
(2) 順天堂大学医学部山岳部『FARÊTE 17』(48-11)

〔新着海外雑誌〕
1. "Alpinismus" '73-9, '73-10

2. "Ascent" No. 1 '73-7

3. "Der Bergsteiger" '73-10

4. "Deutscher Alpenverein" '73-9/10

5. "Österreichischer Alpenverein" '73-7/8

6. "Panorama of Slovakia" '73-4
〔その他〕
1. Nepal Himalaya Center

"Report 1971 Research Scheme Nepal Himalaya"

ルーム日誌 (48年10月)

1 日(月) 集会委員会

2 日(火) 稲門山岳会幹事会

3 日(水) 学生会委員会

5 日(金) 理事会

8 日(月) 山岳研究所竣工式(於上高地)

11 日(木) 雪崩シンポジウム打合せ

12 日(金) 青年懇談会

13 日(土) 常務理事会

17 日(水) 図書交換会

18 日(木) 自然保護委員会

22 日(月) 評議員会

23 日(火) 会報編集委員会

24 日(水) 青年懇談会

25 日(木) 第三〇一回小集会「デンマーク山岳会 ハリーバンドウ氏を招く」

26 日(金) 青年懇談会

31 日(水) 会報編集委員会

十月中来賓者 四七五名 (48年11月)

1 日(木) 鳥水・理太郎・金次郎展準備委員会(以下記念展委員会と略称)

2 日(金) 理事会

5 日(月) 集会委員会

8 日(木) 青年懇談会

9 日(金) 自然保護委員会

14 日(水) 記念展委員会

16 日(金) 記念展委員会

17 日(土) 記念展委員会

18 日(日) 記念展委員会

19 日(月) 海外連絡委員会

20 日(火) 稲門山岳会

財務委員会(十一頁に続く)

会 員 通 信

記念展委員会
21日(水) 記念展委員会
22日(木) 青年懇談会
23日(金) 記念展委員会
26日(月) 集委会
28日(水) 書評委員会
29日(木) 記念展委員会
十一月中来賓者 四七三名

物故会員

三一九 木暮 友枝 昭和四八・一〇
・一〇逝去
一八〇〇 加藤 武三 昭和四八・一〇
・一〇逝去

名誉会員推挙

(48年11月2日)

四八七 辻 莊一
六三四 加納 一郎
九二三 早川 種三
九二四 三田 幸夫
顧問委嘱(48年11月2日)
二七〇二 高山忠四朗
永年会員(88年12月1日)
八五七 中島 正文
八六五 成瀬 岩雄

終身会員

(48年11月)

一八三四 東浜 義男
二〇三七 榎藤 太郎
改年(48年11月)
二一八二 中田清兵衛
退会(48年11月)
五〇〇五 杉浦 耀子

除籍者追加

左記の会員は昭和四四年度以降会費滞納のため除籍されました。

六六五二 竹内 克雄 山梨
訂正 会報三三八号会務報告(一〇頁) 除籍者氏名欄中 五四三一 山岸猛男とあるを、会報三三九・三四〇号会務報告(一一頁) 除籍者氏名欄中 四三六七 新井信太郎、五三七七 千葉工業大学山岳部 六四三八 若月義正、六〇〇六 吉田宏とあるを取消しします。

上高地山岳研究所建築基金

応募者氏名(昭47・7・147・12)

〔単位千円、百円以下切捨〕

内田彦治5、千田早苗3、荻 千夏子10、中井義博3、丸田一夫3、広瀬藤司5、笠原潤二郎10、佐々木高美5、山本久子3、松家 晋5、片桐盛之助10、神谷 恭10、清水迪男3、岸本伍郎3、安藤文子3、瀬名貞利5
(昭和六・一)

安彦六郎20、尹 官柄2、鶴岡元之助10、山崎安治50、中 保10、桜井善志5、若林祐治郎5、前田庄一10、小森恵巳子5、渡辺国治3、亀井 康10、永井俊三10、栗岡 豊3、山田二郎5

羽田英彦10、橋 真琴10、高橋憲二5、桜井信雄5、石田寿郎2、増本 茂10、白田昌一3、池田 剛5、栗阪原健三3、青木 繁5、原田幹市5、吉田礼二5、内山健次3、三辺夏雄10、隅部恵子10、上野英世5、柴田均二20、島尾智恵子5、島尾久子5、小山千乃樹5、若溪堂50、坂本矩祥50、鶴見敏彦3、村山雅美10、大塚博美20、国司吾郎3、菅野時子5、越後支部10、川森左智子10、渡辺公平10、久保田昭二3

伊倉剛三30、林 哲也3、菊地武昭5、渡辺正明5、出口一良10、錦織保清10、立田 実5、伊藤秀五郎10、ドリム

ランド50、遠山博明0.5、田中正智5、曲 義則10、村関利夫5、徳永登喜雄3、津田染鶴3、坪井繁代10、武田満子10、日高信六郎10、金坂一郎10、須田紀二10、北島光子5、飯牟礼昌子5、平沢一郎3、小野崎武二5、庄田元男5、矢野 真10、山田二郎5、尾崎徳郎3、東京印書館山岳会3、湯本三郎5、神保信雄2、若松兼三3、塩入章失3、児島勘次10、周布光兼5、渡辺国治2、遠藤波男3、佐々木徳雄5、

☆上高地山岳研究所

募金状況(48・12・20現在)

※会員

応募件数 五二二件
金 額 四、二五九、九〇三円
目標額対比 八五%

※一般

応募件数 五件
金 額 二七三、〇〇〇円
目標額対比 四五%

※応募されて、未だ納入下さらない
お方は至急お納め下さい。

山岳図書を語る夕べ

左記の通り「山岳図書を語る夕べ」を開催いたします。ふるってご参加下さい。

一、日時 二月二十七日 午後六時

一、場所 本会ルーム

一、講師 島田 巽会員

昭和四十九年一月十日発行

東京都文京区湯島一六六一

利根川商事株式会社ビル

発行所 法人 日本山岳会

編集代表 山崎 安 治

(813) 二二八六(代表)

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技 報 堂

“ヒマラヤ山岳の旅18日間”

問い合わせ先

三井航空サービス株式会社

旅客部 団体課

東京都港区新橋1-18-1
電話(504) 0271(大代表)

期 間：昭和49年3月10日～3月27日

日 程：

費 用：¥358,000 (ローン可)

定 員：15名

御案内人：エベレストビューホテル社長
宮原 巍氏

安全対策：医師並びに参加者の皆様の安全を図るために、現地人医師を第9日目より15日目までエベレストビューホテルに滞在せしめると共に、酸素ボンベの用意も致しております。

第1日目 東 京→ニューデリー	第11日目 エベレストビューホテル滞在
第2日目 ニューデリー→カトマンズ	第12日目 エベレストビューホテルよりタンポチェットレッキング(タンポチェ泊)
第3日目 カトマンズ滞在	第13日目 タンポチェよりエベレストビューホテルへ
第4日目 カトマンズ→ポカラ	第14日目 エベレストビューホテル滞在
第5日目 ポカラ滞在	第15日目 エベレストビューホテル→カトマンズ
第6日目 ポカラ→カトマンズ	第16日目 カトマンズ滞在
第7日目 カトマンズ滞在	第17日目 カトマンズ→カルカッタ
第8日目 カトマンズ→ルクラ：徒歩にてモンジョへ(モンジョテント泊)	第18日目 カルカッタ→東 京
第9日目 モンジョ→ナムチェバザール	
第10日目 ナムチェバザールより徒歩にてエベレストビューホテルへ	

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

遙かなる未踏の尾根

マカール1970年

日本山岳会東海支部

＜B 5判430頁・カラー64頁＞定価4,800円

ブータン感傷旅行

小方全弘著 ＜菊判280頁＞定価980円

森林・草原・氷河

加藤泰安著 ＜A 5判482頁＞定価1,500円

すこし昔の話

初見一雄著 ＜四六判400頁＞定価1,200円

遠い山・近い山

望月達夫著 ＜B 6判334頁＞定価960円

山の古典と共に

大島堅造著 ＜四六判280頁＞定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著

＜A 5変型判340頁＞定価1,200円

雪原の足あと

坂本直行著 ＜B 5判206頁＞定価2,800円

山日記1974年版

日本山岳会編

＜A 6判342頁＞定価850円

山 岳

日本山岳会編

＜A 5判＞

67年	2,500円
66年	2,300円
65年	2,000円
64年	2,000円
63年	2,200円
62年	2,000円
総索引	1,000円

国立公園カレンダー

国立公園協会編

＜A 5判リング綴り＞定価960円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編 ＜B 6判202頁＞定価480円

山で唄う歌1集・2集

戸野 昭・朝倉 宏編

＜A 6判126頁＞1集240円・2集280円

原野から見た山

坂本直行画文集

＜B 5箱入布特製本＞定価4,200円

いろりばた

南会津山の会

＜B 24どり判320頁＞定価1,900円

シブトンの自叙伝

未踏の山河

大賀二郎・倉知 敬訳

＜A 5判440頁＞定価1,900円

日高山脈

北大山の会編

＜菊判362頁＞定価2,200円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著 ＜菊判584頁＞定価2,500円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

＜A変型208頁＞定価3,600円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編 ＜A 5判350頁＞定価900円

登山・スキー用具専門店

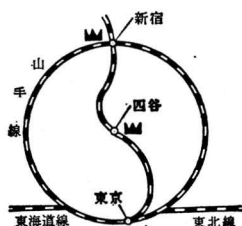
山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

●買いやすい
山の店

●北へ来たら
山の店

●フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なるべくなんにも
持たない方がいい
けれども、どうしても
要るものがある。
なにしろ人間ですから
たしとる山ですから
どうしても必要なもの
をこころえこまる
責任はもっています

かたるぐシンティ
でんや 281-8456
中央区・八重ス4の1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440

